朝倉日本語講座 8

敬語

北原保雄［監修］
菊地康人［編］

朝倉書店

北原保雄
[監修]

朝倉日本語講座

8

敬語

江苏工业学院图书馆
藏书章

菊地康人
[編]

朝倉書店

監修者略歴

北原保雄（きたはらやすお）

1936年　新潟県に生まれる
1968年　東京教育大学大学院文学研究科博士課程退学
現　在　筑波大学長
文学博士

編集者略歴

菊地康人（きくちやすと）

1954年　東京都に生まれる
1982年　東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
現　在　東京大学教授（留学生センター，大学院人文社会系研究科兼担）
文学修士

朝倉日本語講座 8
敬　　語

定価はカバーに表示

2003年3月25日　初版第1刷

監修者　北原保雄
編集者　菊地康人
発行者　朝倉邦造
発行所　株式会社 朝倉書店
東京都新宿区新小川町6－29
郵便番号　162－8707
電話　03（3260）0141
FAX　03（3260）0180
http://www.asakura.co.jp

〈検印省略〉

© 2003〈無断複写・転載を禁ず〉

教文堂・渡辺製本

ISBN 4-254-51518-9　C 3381

Printed in Japan

刊行のことば

新しい世紀が始まった。20世紀の，特にその最後の四半世紀においては，日本語をめぐる大きな変化があった。日本語自体の変化もさることながら，日本社会が急速に国際化，情報化したことに伴い，日本語の置かれている状況が著しく変化した。

日本が経済大国になったこともあって，海外における日本語の需要あるいは日本語熱が高まり，また，国内にあっても外国人留学生が大幅に増加して，外国人のための日本語教育の充実が緊急かつ重要な課題となった。マスメディアが発達し，情報技術が開発され，それによって日本語が少なからぬ影響を蒙った。最近日本語を正しく使うことのできない若者が増えていると嘆く向きも多い。

規範を重視する人は，新生の言葉遣いを日本語の乱れとして非難し，伝統的な言葉遣いを正しいものとして守ろうとする。しかし，言葉は本来常に変化して，定着することのないものである。いろいろの言葉が飛び交うのはいつの時代にも共通する現象である。しかし，それにしても，昨今の日本語の変化はあまりにも激しく速い。

一方，日本語についての研究も，この2,30年の間に飛躍的に進展した。その中で，主として日本人だけが自国の言葉として日本語を研究する「国語学」から，外国人も含めた研究者が世界の言語の中の一つとして日本語を研究する「日本語学」へと転換したことが，特筆すべき変化であろう。日本語についての研究は今や世界規模のものになっている。

そして，日本語の仕組みに強い関心を抱く人が激増している。日本語の仕組みについての理解がさまざまな分野で必要とされるようになっただけでなく，広く一般の人々の間にも，自分の使用している日本語の仕組みや歴史について知りたいという欲求が強くなっている。今，出版界では日本語ブームだという。むべなるかな，人々は，日本語について書かれた良書を強く求めているのである。

最近，国の施策として，国語や国語教育が重視されるようになってきた。平成13年12月には，「文化芸術振興基本法」が公布，施行され，国の基本的施策として，「国は，国語が文化芸術の基盤をなすことにかんがみ，国語について正しい理解を深めるため，国語教育の充実，国語に関する調査研究及び知識の普及その他の必要な施策を講じるものとする。」こととなった。また，平成14年には文化審議会も，中央教育審議会も，文化を大切にする心を育てるために，あるいは教養を身につけ深めるために，国語を重視すべきことを答申している。これらを踏まえて，文部科学大臣から，文化審議会に対して，平成14年2月に，「これからの時代に求められる国語力について」の諮問がなされた。なお，ここでは，国語という呼び方がなされているが，日本語と本質的に異ならないものであることは言うまでもない。

こういう機運の中にあって，これまでの日本語研究の成果を総括し，最新の切り口で，日本語の全領域にわたり，日本語の諸相について解明する講座を刊行することは，きわめて時宜を得たものであると言えよう。本講座は，現在学界の第一線で活躍している研究者の編集，執筆によって，最新の研究成果に基づく最高の内容を平易に論述した本格的な日本語講座である。このような本格的な日本語講座はここしばらく刊行されていないので，まさに現時点における最新・最高の日本語講座であると自負しても許されるだろう。

専門外の研究者や，日本語に関心を持つ一般の方々にも，広く読んでいただきたい。

北原保雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

敬語は，〈難しい〉面があることは確かだが，また，なかなか〈おもしろい〉言語現象でもあり，これまで，さまざまな観点から研究が行われてきた。敬語だけを扱った専門的な研究書も，1924年の山田孝雄（よしお）氏『敬語法の研究』以来多数上梓されてきたし，ほかにも，書物の一部を敬語に割いたものや，敬語を扱った論文は，夥しい数にのぼる。また，一口に敬語の研究といっても，そのテーマにはさまざまなものがある。敬語は，このように，研究史的にも，研究量的にも，またテーマの幅広さの面でも，まことに豊かな研究領域である。

そうした研究成果の中から，ごく一部だが，ふさわしい部分を取り出し，幅広く想定した読者に紹介するのが，本巻の趣旨である。方針としては，まず，章の立て方をできるだけ魅力的なものにするように心がけた。その上で，必要な基礎知識はもちろん，読者に興味をもっていただけそうな話題や，斬新な成果も盛り込み，かつ，今後の研究の方向性についても適宜触れるようにした。そして，これらの内容を，特に予備知識を必要としないように述べることに意を払った。

まず「第1章　敬語とその主な研究テーマの概観」は，全体の導入を兼ねて，敬語について概説するとともに，敬語の主な研究テーマについても整理する。

この第1章も含めて第4章までは理論系の章である。第1章の最後で，敬語を広く捉える方向についても触れるが，これを受けて「第2章　「待遇表現」の諸側面と，その広がり――狭くとらえた敬語，広くとらえた敬語――」では，敬語よりも広い「待遇表現」を考察し，その概念をさらに拡張する新たな提案を行う。その際，話手の「表現意図」に目が向けられるが，「第3章　「表現行為」の観点から見た敬語」は，まさにこの「表現意図」を基軸とし，語用論的観点を豊かに具えた新しい敬語分析である。「第4章　テキスト・ディスコースを敬語から見る」は，敬語と文体の関係を，旧来の見方をはるかに超えて分析・整理する。

第5章から第7章までは社会言語学的な内容である。「第5章　敬語の現在を読む」は，各種の敬語調査から敬語の現在を存分に読み取る。「第6章　敬語の社会差・地域差と対人コミュニケーションの言語問題」は，言葉の多様性の実状とともに，その社会的な「重さ」についても浮かび上がらせる。「第7章　敬語調査から何が引き出せて，何が引き出せないか」は，豊富な実例を基に，標題に示した問――この種の研究に関する根源的な問――に答えるものである。

第8章から第11章までは敬語史に関するものだが，「上代・中古・……」といった時代別の章立てはあえて採らず，限られた紙幅の中で，敬語史を考える上で重要と思われる論題を立てる道を選んだ。まず「第8章　文献資料から敬語の何が読みとれて，何が読みとれないか」は，上の社会言語学の第7章に対応する，敬語史における同様の根本的な問に対して，真剣に向き合う。「第9章　中古の共時態としての敬語，動態としての敬語」は，古典語の中では読者に最もなじみが深いと思われる中古語に一章を充て，その静態と動態を敬語史の中で捉えて描く。「第10章　謙譲語から見た敬語史，丁寧語から見た敬語史――「尊者定位」から「自己定位」へ――」は，敬語史的に見て尊敬語よりもはるかに興味深い謙譲語と丁寧語に絞って目を向け，敬語史上の一定の変化傾向に関する新説を提示する。「第11章　敬語史と現代敬語――付　敬語研究小史――」は，敬語の通史と敬語研究の小史をコンパクトに描き出す。

最後に「第12章　外国人から見た敬語」は，日本語を自由に操り日本語を研究する外国人の若手研究者が，その目で見た日本語の敬語について論じる。

なお，最近のいわゆる「ポライトネス」研究については，本講座第1巻で扱われるため，本巻では一章を立てなかったが，第1・2・5章で少しずつ触れる。

一点お断りしておきたい。第1・2・3章の「待遇表現」という語の指す範囲が，章により，広狭の違いがある。第1章が最も狭く，第3章が最も広い。読者には申し訳ないが，各研究者の使い方なので，あえて統一を避けた。

以上の紹介が示すように，幅広さと斬新さ，本質的な論議と現状の観察とを，ともに具えるよう努めたつもりである。編者の努力が生きていれば幸いである。

2003年2月

菊地康人

監修者

北原保雄	筑波大学長

編集者

菊地康人	東京大学留学生センター教授

執筆者

菊地康人	東京大学留学生センター教授
熊井浩子	静岡大学留学生センター助教授
蒲谷宏	早稲田大学大学院日本語教育研究科教授
野田尚史	大阪府立大学総合科学部教授
浅松絢子	別府大学文学部教授
吉岡泰夫	国立国語研究所研究開発部門上席研究員
尾崎喜光	国立国語研究所研究開発部門主任研究員
辛島美絵	九州産業大学国際文化学部助教授
森野崇	二松学舎大学文学部助教授
森山由紀子	同志社女子大学学芸学部助教授
西田直敏	甲南女子大学大学院文学研究科教授
杉山アイシェヌール	アンカラ大学言語・歴史・地理学部助手

（執筆順）

目　　次

第1章　敬語とその主な研究テーマの概観 ……(菊地康人)… 1

1. 敬語とは　*1*
2. 敬語の捉え方　*2*
3. 敬語の種類；各種の敬語の性質　*6*
4. 敬語使用に関係する社会的・心理的諸要因　*16*
5. 敬語研究のさまざまなテーマ・方向　*20*

第2章 「待遇表現」の諸側面と，その広がり
――狭くとらえた敬語，広くとらえた敬語―― ……(熊井浩子)… 31

1. 待遇表現とはなにか　*31*
2. 待遇表現選択に関わる「環境」　*33*
3. 待遇表現で選択されるもの　*37*
4. 待遇表現が伝える意味　*40*
5. 待遇に関わるその他の表現
   ――恩恵や権限，私的領域に関わる表現――　*41*
6. 表現意図と待遇表現　*44*
7. 〈ポライトネス〉と待遇表現――働きかけ方式とわきまえ方式――　*46*
8. むすび　*50*

第3章 「表現行為」の観点から見た敬語 ……(蒲谷　宏)… 53

1. 「表現行為」の観点から考察するための基本的な枠組み　*54*
2. 「表現」としての敬語　*59*
3. 「丁寧さ」の原理――配慮・敬意の表し方――　*61*

4. 「行動展開表現」 *66*

第4章 テキスト・ディスコースを敬語から見る ……(野田尚史)… 73

1. テキスト・ディスコースと敬語の関係 *73*
2. テキスト・ディスコースを敬語から見る方法 *74*
3. ていねいさから見たテキスト *76*
4. ていねい調の中に中立形が現れるテキスト *78*
5. 中立調の中にていねい形が現れるテキスト *79*
6. ていねいさから見たディスコース *80*
7. ていねい調の中に非ていねい形が現れるディスコース *83*
8. ていねい調の中に中立形が現れるディスコース *85*
9. 非ていねい調の中にていねい形が現れるディスコース *88*
10. まとめ *90*

第5章 敬語の現在を読む ……(浅松絢子)… 93

1. 敬語に対する意識 *93*
2. 敬語使用の実態 *100*
3. 敬語の周辺 *109*
4. 現代の敬語使用の特徴と今後の方向 *111*

第6章 敬語の社会差・地域差と対人コミュニケーションの言語問題
……(吉岡泰夫)… 117

1. 敬語の多様性の調査研究と言語問題 *117*
2. 規範意識の社会差に関する言語問題 *122*
3. 敬語の地域差に関する言語問題 *129*
4. 言語教育・言語政策の課題 *136*

第7章 敬語調査から何が引き出せて，何が引き出せないか …(尾崎喜光)… 139

1. 「調査」(「調べる」)とはいかなる行為か？ *139*
2. 敬語調査の特徴 *144*

3. 敬語調査から引き出せるもの　*146*
4. 敬語調査から引き出せないもの　*154*

第8章　文献資料から敬語の何が読みとれて，何が読みとれないか
……（辛島美絵）… 159
1. 文献を資料とする国語研究と口頭語を資料とする国語研究　*159*
2. 敬語研究における文献資料　*164*
3. 読みとれない敬語の問題と解決の方向　*171*
4. おわりに　*175*

第9章　中古の共時態としての敬語，動態としての敬語 ……（森野　崇）… 177
1. 共時態として見た中古の敬語　*177*
2. 動態として見た中古の敬語　*194*

第10章　謙譲語から見た敬語史，丁寧語から見た敬語史
――「尊者定位」から「自己定位」へ―― ……（森山由紀子）… 200
1. はじめに　*200*
2. 謙譲語から見た敬語史　*203*
3. 丁寧語から見た敬語史　*213*
4. おわりに　*221*

第11章　敬語史と現代敬語――付　敬語研究小史―― ……（西田直敏）… 225
1. 敬語の起源と現代敬語　*225*
2. 古代の「自敬表現」について　*227*
3. 古代敬語の日常化　*230*
4. 相対敬語意識の成立と現代方言における絶対敬語　*231*
5. 丁寧語の発生と発達　*234*
6. 敬語の重層――二重敬語，三重敬語――について　*236*
7. 美化語としての「御」の成立　*237*
8. ロドリゲス『日本大文典』の敬語記述と現代敬語　*238*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

9. 近世敬語から近代敬語へ *241*
付. 敬語研究小史 *243*

第12章 外国人から見た敬語 ……(杉山アイシェヌール)… 252
1. はじめに *252*
2. 「敬意」ということ *252*
3. 外国人への敬語教育の諸問題 *253*
4. やりもらい動詞 *267*
5. 現代日本社会における敬語の諸問題は外からどう見えるか *270*
6. まとめ *273*

索 引 ……277
事項・人名索引 *277*
語彙索引 *289*

第1章
敬語とその主な研究テーマの概観

菊地康人

ここでは，敬語の基礎的な知識や敬語についての捉え方を略述し（第1～4節），あわせて，敬語についての主な研究テーマや最近の研究方向についても触れる（第5節）。

●1 敬語とは

敬語という言葉が指す対象（範囲）については，研究者の間でも，また学校の国語教育の場でも，概ね共通の了解が成立してきたといえる。すなわち，「おっしゃる」「いらっしゃる」の類（いわゆる尊敬語）や「申し上げる」「まいる」の類（いわゆる謙譲語），また「です」「ます」の類（いわゆる丁寧語）などを合わせて，敬語と呼んできた[1]。

このような敬語と呼ばれる表現に定義を与えるならば，

> 敬語とは，同じ事柄を述べるのに，述べ方を変えることによって敬意あるいは丁寧さをあらわす，そのための専用の表現である[2]

ということになろう。ここで一つのポイントは，〈同じ事柄を述べる〉という点である。「Aさんが言った」と述べても「Aさんがおっしゃった」と述べても，あるいは「5時に着く」と述べても「5時に着きます」と述べても，事柄としては同じである。同じ事柄を「おっしゃる」「……ます」のように述べ方を変えて述べることによって敬意をあらわすのが敬語なのである。

もっとも，これは，伝統的に敬語とされてきたもの（＝最も狭い意味での敬語）を定義しようとした場合の規定であり，敬語に類するものをより広く捉えようと

することもできる。その一つとして，待遇表現という概念がある。これは，敬語のほか，敬語とは逆の働きをもつ，たとえば「言う」意の「ぬかす・ほざく・言いやがる」などの卑罵語（軽卑語）や，「○○ちゃん」のような親愛語などを含むもので，敬語を含めて，敬語よりも広いものを指す。待遇とは，（人に対する）扱いという意味であり，「おっしゃる」と「言う」と「ぬかす」とでは，事柄自体は同じでも，その人に対する待遇が違うわけである。敬語的なものをさらに広く捉えていこうとする試みは，このような待遇表現のほかにも，なお考えられるが，それについては第5節の(3)で触れることとして，以下では，まずは上述のようなごく普通の意味での敬語を対象として述べ進めていくとしよう。

●2　敬語の捉え方

(1) 二つの側面——社会言語学的な側面と文法的な側面

たとえば，〈相手が，あるところ（たとえば，パーティー）に行くかどうか〉を尋ねたいとする。簡潔にいえば〈行くか〉という内容であるが，「どうもここはできるだけ丁寧な言い方をしたほうがよさそうだ」と考えて，「行きますか」ではなく「いらっしゃいますか」と言う，という場合を例に考えてみよう。

これを，次の二つの側面に分けて捉えることができるであろう。

・話手が「ここはできるだけ丁寧な言い方をしよう」と考えること

・〈「いらっしゃる」は「行く」の丁寧な言い方である〉ということ

この両者が複合した結果として，上述のような言語行動——「ここはできるだけ丁寧な……」と考えて，問題の相手に，「行く」の代わりに「いらっしゃる」を使うという行動——が起こるわけである。

この第一の側面は，たとえば「相手は自分よりも目上なので，丁寧な言い方をしよう」というようなことである。だが，ほかにも，「相手のほうが目上というわけではないが，相手を立てた（あるいは自分の品格を保った）言い方をしよう」とか，「あまり親しくない相手なので，距離を置いた言い方をしよう」とか，「日頃はもっとくだけた言い方をしている相手なのだが，改まった場なので，堅い言い方をしておこう」とか，さまざまな考慮から，丁寧な言い方をする場合があるだろう。また，考慮の結果，丁寧な言い方をせずに，普通の言い方，あるいはむ

しろ乱暴な言い方をするという場合もあろう。これらも含めて，より一般的な形で述べれば，上の第一の側面は，次のように述べ直すことができる。

（Ⅰ）　話手が，その具体的な人物や場面にかかわる社会的・心理的な諸要因を考慮した上で，問題の人物に，あるレベルの待遇を与えようとすること

「目上か同等か目下か」「相手を立てるか否か」「相手との心理的な距離はどの程度か」「どのような性質の場面か」などといった社会的・心理的な諸要因を考慮した上で，「ここは，しかじかのレベルの待遇をしよう」と決めるわけである（先程から「ここは，……」と述べてきたが，「ここ」とは，〈当該の具体的な人物・場面にかかわる社会的・心理的な諸要因（についての話手の評価）〉を指すといえるだろう）。簡単にいえば，（Ⅰ）は〈社会的・心理的な諸要因と，待遇レベルとの関係〉であり，それは，〈現実の世界〉で個々の具体的な人物や場面に接した上で（またはそれらを想定した上で）決まることである。

これに対して，先の第二の側面〈「いらっしゃる」は「行く」の丁寧な言い方である〉ということは，〈現実の世界〉での個々の具体的な人物・場面とは切り離して捉えられる，純粋に〈言葉の世界〉におけるきまりである。第一の側面についていえば，たとえば，社内で幅をきかせているAさんを恐れて「いらっしゃる」を使う場合もあれば，目下だが人柄のいいBさんへの気配りから「いらっしゃる」を使う場合，初対面のCさんに「いらっしゃる」を使う場合など，まことにいろいろな場合があるわけだが，こうした〈現実の世界の社会的・心理的諸要因〉とは切り離して，これらのあらゆる場合を通じて，〈「いらっしゃる」は「行く」の丁寧な言い方である〉というきまりは，〈言葉の世界〉のきまりとして常に成り立つものである。より一般的な形で述べれば，この第二の側面は，次のように述べられる。

（Ⅱ）　ある語形を使うことで，ある人物（話題となる人物や聞手など）に，あるレベルの待遇を与えることになる（という法則性がある）こと

なお，ここまでのところは，論のわかりやすさを旨として，〈「いらっしゃる」は「行く」の丁寧な言い方である〉と述べてきたが，これは大まかな述べ方である。厳密には，「いらっしゃる」は「行く」の丁寧語ではなく尊敬語であり，後で詳しく見るように，〈「いらっしゃる」は，「行く」の主語を高める言い方であ

る〉と述べるほうが正確である。(Ⅱ)の「ある人物」というのは，このように「主語」とか「補語」(後述)とか，あるいは「聞手」といった文法上の概念として規定できる人物のことである(これに対して，先の(Ⅰ)の「人物」とは，「幅をきかせているAさん」のような具体的な人物のことである)。簡単にいえば，(Ⅱ)は〈語形(および，問題の人物の文法上の性質＝「主語」か「補語」か「聞手」かといったこと)と，待遇レベルとの関係〉であり，こちらは，個々の具体的な人物や場面を超えて〈言葉の世界〉で成り立つきまりである。

このように，敬語という言語現象は，

(Ⅰ)　〈現実の世界〉での〈社会的・心理的諸要因と，待遇レベルとの関係〉

(Ⅱ)　〈言葉の世界〉での〈語形(および問題の人物の文法上の性質)と，待遇レベルとの関係〉

に分けて捉えることができる。いわば，(Ⅰ)は社会言語学的な側面，(Ⅱ)は文法的な側面といってもよい。

このうち，(Ⅱ)のほうの法則性は，先のたとえば〈「いらっしゃる」は，主語を高める言い方である〉のように，常に成り立つ(いわば100%正しい)法則性であるが，(Ⅰ)のたとえば〈目上のことは高く待遇する〉といった事柄は，100%成り立つという性質のことではなく，仮に法則性と呼ぶにしても，もとより傾向的な法則性にとどまるものであることに注意しておきたい。目上に対しても高く待遇しない場合もあるし，個人差や偶発的な要因にも支配されやすい。実は，(Ⅰ)と(Ⅱ)を分けたのは，分けることによって，100%成り立つ法則性の世界を作りたい，という動機もあってのことである。両者を分けずに一体として述べ，たとえば〈目上が「行く」ことは，「いらっしゃる」と表現する〉などと述べてしまっては，これも傾向的にしか成り立たない法則性にとどまってしまう。(Ⅱ)の部分を析出することで，この部分は100%成り立つ法則性として述べることができるわけである[3]。

(2) 三つの観点——〈語形〉と〈機能〉と〈適用〉

さて，この(Ⅱ)については，さらに〈語形〉の問題と〈機能〉の問題とに分けて捉えることができる。たとえば

「行く」(および「来る」「いる」)の敬語として「いらっしゃる」という形がある

というのが〈語形（かたち）〉の問題，

「いらっしゃる」は主語を高める働きがある（尊敬語である）

というのが〈機能（はたらき）〉の問題である。一方，先の（Ⅰ）は，たとえば

話手から見てAさんは目上なので，話手はAさんのことを高める

というようなことだが，これは，〈語形〉や〈機能〉に対して名づけるならば，敬語あるいは待遇レベルの〈適用（あてはめ）〉の問題と呼ぶことができよう。

〈話手が，目上であるAさんに《Aさんが行くかどうか》を尋ねる場合，「行きますか」ではなく「いらっしゃいますか」と言う（ことが適切である）〉ということは，今あげた三つの事柄が揃って初めて成立することである。普段は一々このように分析せずに敬語を使っているわけだが，敬語を言語学的に捉えて解析しようとする場合には，この三つの観点に分けて見ることはしばしば有効である。

実は，敬語の誤用や不適切な使用にも，この三つのタイプのものがある。たとえば，

（1）×明日のパーティー，いらっしゃられますか？

と言うとすれば，これは〈語形〉の不適切――「いらっしゃる」だけでも尊敬語であるのに，それにさらに「れる」を添えた過剰――である。

（2）×（犬を捜して）私どものポチが，お宅にいらっしゃらなかったでしょうか？

などと言う人があれば，この人は「いらっしゃる」が主語を高める尊敬語であることを知らず，ただ物事を丁寧に述べる丁寧語だと思って使ってしまったのだろう。つまり，「いらっしゃる」の〈機能〉を正しくわきまえていないための誤りである。また，他人に

（3）×父は先月中国にいらっしゃいました。

と言うとすれば，この人はおそらく，「いらっしゃる」が主語を高めるという〈機能〉はわきまえているものの，「身内を高めてはいけない」という〈適用〉のルール（先程の（Ⅰ）に関するルール）があることを知らないのである[4]。以上のような各種の誤用からも，敬語を〈語形〉〈機能〉〈適用〉に分けて捉えることの妥当性が見て取れるであろう[5]。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com